

テニソンの「聖杯」とその傳説の変遷

石 本 キ ズ

テニソンの「国王牧歌」(Idylls of the King)のうち「聖杯」(The Holy Grail)の一卷は全篇中最も複雑な内容、神秘的な物語を豊麗な筆に托して表現し、全篇展開上を中心であり、全篇の中心思想であるところの「精神と戦ふ感覚」("Sense at war with Soul")を最も直接に且つ十二分に批瀝してゐる。聖杯或は聖盤の伝説は恐らく史上の人物ではないアーサー王に関係のある伝説々話群(Arthurian Cycle)中の数多のロマンスの中で、騎士ランスロットの物語は中世期騎士道の理想の典型的なものであり、聖盤の伝説は中世期の僧院礼讃の禁欲的傾向と神秘思想の代表的なものであると言ふ事が出来る。さて、聖杯或は聖盤といふGrailはキリストが最後の晩餐に用ひた盃(cup)と一般に考へられてゐるが、オックスフォード英語大辞典に拠ると最後の晩餐に用ひられた盃又は浅い皿でアリマタヤのヨセフが之に十字架上のキリストの血を受けたのであると。即ち最後の晩餐に用ひられたものとヨセフがキリストの血を受けたものが同一視されてゐる。然し聖盤伝説の変遷の段階を探つて見ると必しもそうではない。Grailの語源も又まち／＼であるが、確実な転化の道はラテ

ン語の crater (cup) < cratalis と gradalis である。十二世紀の末頃アリマタヤのヨセフ物語を書いた仏蘭西のロベール・ド・ボロン(Robert de Boron)はこの語源 et 愉快はその器を見る人の受ける悦楽感からこう名づけられたものであり、Grail と Agreeer との音の相似からと言つてゐるが、之はいかにも中世期の間に合せの語源学によるものに過ぎない。この問題は聖盤伝説の起源と共に、テニソンの聖杯そのもののように
"All over covered with a luminous cloud," で騎士等の探索と同様に全く掴み所のないもので、多くの学者の研究にも拘らず、決定的なものを見る事が出来ない状態にある。

「十三世紀までのアーサー伝説の發展」の著者ブルース(J.D. Bruce)は聖杯伝説の主なものを仏、ケルト、英、独に分類して年代順に挙げてゐるが、仏のクレシアン(Chretien de Troyes)が韻文で書いた「聖盤物語」(紀元一一七四—八〇)が劈頭であり、その他の仏の聖盤伝説はそれから約五十年間に悉く書かれてゐる。伝説物語の著者でこの伝説の發展に大きな貢献をしたと思はれるものは前記のクレシアンとローベル及び独のウォルフラム

・フォン・エッシエンバッハ(Wolfram von Eschenbach)の三人である。彼等のそれ／＼違つた伝説の荒筋を述べる事はこの伝説の変化の要素を示す上からも無意味ではないであらう。

一、クレシアンはフランダーズのフィリップ伯爵から一書を与へられ、それを典拠として「聖盤物語」を書いたとプロローグに述べてゐる。この話の主人公パーシヴァルの父も兄も騎士の果し合ひで殺されてから、母は幼い彼を世俗と武士道から隔離して森の奥深くで育てた。若者となつたパーシヴァルはふと山中で見かけた甲冑をつけた騎士の雄姿に魅せられ武士に憧れてアーサー王の許へ赴いた。城の近くで赤い鎧の武士が王の黄金の杯を盗んで行くのを見かけた。アーサー王は若者の素朴さに心惹かれ望みを叶えたと約束した。城への途中で会つた武士の赤い鎧が着たいので、追跡して戦つて勝ち、鎧を奪ひアーサー王の璽を取り戻した。パーシヴァルは赤い鎧の騎士として武者修業をし、武勳をたてた。母の許へ帰る途中、山で行き暮れて、川で魚釣をしてゐる人に一夜の宿を乞ひ、城に迎へられた。この人は腿に槍傷を受けてゐるので魚釣に心を慰めてゐたため、富める漁夫と呼ばれてゐた。その夜若者は城内で聖盤行列といふ不思議な光景を見た。従臣が一振の太刀を捧げて来た。主人は之を煙からの贈物で神の靈が宿つてゐるといつて彼に贈つた。次に血の滴る槍を捧げた従者と、十の枝に燈のついた燭台をもつた二人の下僕、そして娘が聖盤を運んで来た。それは燦然と輝き燭台の光を消して了ふ程であつた。最後に別の娘が銀の皿を奉じて来た。この行列は不自由な城主の横たはつてゐる椅子と巨大な炉との間を行きつ戻りつするのであ

つた。若者は何事かと問ひ度かつたが騎士の師範に教へられた輕しく物を問ふものではないとの戒を思出し沈黙を守つた。翌朝起きて見ると城の人は見当らず、彼とその馬だけが残されてゐた。

我家をさして森を行くと一人の女が昨夜の城主、魚釣の武人の屍を抱いて泣いてゐた。昨夜の不思議な光景の意味を問ふてくれさへすれば富める漁夫と彼の国にかけられた呪は解かれる筈であつたのに、問はなかつたために城主は死んで了つたと云つた。パーシヴァルは聖盤の意味を問はない罪と母親を置去りにし死に到らせた罪とのために冒険の旅をつづけて行く。クレシアンは聖盤が何ものであるか説明も又暗示すらも与へてゐない。そして彼の筆の後を承けたゴーテ H (Gautier) ギルベール (Gerbert) マネシヤ (Manesier) 1214—20 等によつてもこの神秘は解明されてゐない。

二、ロベール・ド・ボロンの作(一一八〇—一一九九)聖杯物語の初めは福音書のキリスト受難週の記事と大体に於て一致してゐる。聖杯は最後の晩餐に用ひられたもので、キリストがピラトの許に送られた時、聖杯も共にとゞけられたが、ピラトはキリストに關する一切から手を洗ひたいとの動機から、之をキリストの屍を葬るヨセフに与へた。ヨセフはこの杯にキリストの血を受けた。ユダヤ人は復活の奇蹟を驚き惑つて屍の紛失についてはヨセフを責任者であるとし彼を投獄し飲食物を与へなかつた。復活のキリストは光に包まれた杯を携えて獄中のヨセフに顯れ、聖い血をたたえた杯を彼のキリストに対する愛の故に与へ、ヨセフからその妹婿にそしてその後裔に伝へるように、そして最後の晩餐に

ならつて聖餐を守るやうにと告げ教へた。ヨセフはこの杯は自宅に隠して来た筈と訝りつつも有難く受けた。其の後羅馬のヴェスパシアンはキリストを磔刑にした猶太人に復讐戦を挑んで来たときヴェスパシアンは獄にヨセフを訪ねた。入獄以来飲食物を与へられなかつた彼が元気で出て来て獄中で受けたキリストの教を伝へた。出獄後はモーゼの如く同信の友をひき連れて遠国に移り住み幸福な社会を組織してゐたがやがてこの社会にも肉欲の罪のために不幸が起つた。それは人々が聖杯に接しないためであると聖靈に示されてからは聖餐式を守る事になつた。ヨセフはキリストを象徴するため魚を釣つて卓上に置いた。聖杯を見ただけで神の恩寵に陶然となり卓の前に我を忘れて座したのは罪に染まらない人々で、何の反応も現はさない人々は罪人であつた。ヨセフの死後は妹婿のブロンが聖杯を継ぎ、教を伝へ、又聖餐式の魚を釣る事も彼の勤めとなつた。そして彼は富める漁師と呼ばれた。なほこの物語にブロンの十二人の子供の事、その末裔にラメスロットが出た事等も述べてゐる。ローベールの聖杯の機能は恩寵を見る人々に感じさせ恍惚とさせるといふ全く靈的なものであるが、十数年獄中に在つて外部から食物を供給されず而も元氣であつたと在るが、聖杯がヨセフに飲食物を備へたとは記してない。つまり恩寵により飲まず食わず、キリストの教へを生命の糧として奇蹟的に生き存へて居たと解釈すべきであらう。飲食物を産み出し、或ひは健康や青春を賦与する機能を聖杯に關聯させたのはローベルより後の聖杯物語に見られるもので、ローベルに在つては最後の晚餐と聖餐の典祀との關聯から、最後の晚餐を記念する聖杯はキリ

ストの体を象徴するものとなしてゐる点、中世期の象徵主義の特性である。クレシアン物語とローベルのそれとは物語の筋から見るとその關係は極めて稀薄で、前者に在つてはキリスト教的要素は全く見られず、後者に於てはキリスト教の歴史の重要な一齣を承つてゐるかの如くに書かれてゐる。歴史に準じて言へば後者は前者に先行すべきものであらう。この点に於て両者の創作年代の先後についての異論も当然と考へられるが、聖餐傳説の非キリスト教的起源を主張する人々は両者は遊離して發展した二つの傳説の系統であるといふ。唯兩者の共通点は富める漁師(The Rich Fisher)の存在と、又この神秘的な人物が聖杯の所有者であるといふ点である。恐らくローベルはバーシヴァルの冒險の詳細に通じてゐなかつたとしても、神秘的な人物と器物とをヨセフの歴史に結びつけて書いたのであらうとブルースは推定してゐる。又ローベルの他の作品から判じてある局限された意味に於て、バーシヴァルはヨセフの典拠であり得るとも云つてゐる。傳説物語の作品はその取扱はれた傳説の固定とも云ふべきであらうが、その中にも傳説本来の浮動性を認める事が出来るので、不確実ながらも變遷の段階を推定するのである。

三、次に独の貢獻者ウォルフ・エッセンバッハのバルチヴァールはクレシアンの作とキョート・オヴ・プロヴァンス(Kyoto of Provence)といふ人の詩とを資料としたと彼自身言つてゐる。彼の聖餐はキリストの体とか葬りを意味するのでなく、更に広い意味に持たせてゐる。聖餐とはルシファール(Lucifer)が天から降されたとき天使が冠から一つの宝石を落してくれた。その石

が後に蓋の形に刻まれ、更に後にアリマタヤのヨセフの手からキリストに捧げられ、かくして最後の晩餐に用ひられるやうになつた。キリストを葬るに際し血を受けた蓋に神力が加はりその蓋の在る所には常に仕合せがあり、瀕死の者も之を見れば尙ほ十数日生を保ち得た。年々主の死の記念日には白い鳩が聖霊を天からもたらし淨い少女等の支へる蓋の上に置いた。聖蓋の奉仕に當るため各国のあらゆる階級から選ばれた若い男女は *Glenn* 城に集つて来た。森の中で母の手一つで育てられたバルチヴァールがこの城の王になるまでの筋はクレシアン¹の物語に似てゐるが、クレシア²ンに在つては聖盤の意味を問ふか否かの問題で、問へばお伽話的呪文が解けるといふだけで別に意味を含ませてゐない。而しウォルフラムにあつては同胞に対する同情心が缺如してゐたため問はなかつたので、之は道德的罪惡であるとし、後に今一度問ふ機会を与へられて、この時同情心を充分に披瀝したため以前の罪は贖はれ主となる事が出来た。ウォルフラムのバルチヴァールは純粹な伝説の範圍を出て心理象徴に用ひられ、無智に近い人間の靈性が意義的に努力しつつ高揚し行く姿を表現してゐる。聖杯はつまり靈性の高揚の目標とされてゐる。ウォルフラムの聖盤伝説に対する今一つの貢獻はパーシヴァルの息子ローヘン格林とその結婚並びに白鳥騎士を取入れた事で、之等を合せて十九世紀の偉大な樂劇作者ワグナーは「ローヘン格林」及び「パーシヴァル」の大典としたのである。

どの伝説々語の作者にとつても実に多数の物語が浮動してゐたわけであるから各自の嗜好と興味により随意に取捨選択をする自

由をもつてゐたわけである。そこで全く系統の異つた伝説が結合されてゐるといふやうな現象を屢々見られる。こうした伝説は人類生活の至つて若い時代の神話に根拠を有するものであるから、絶えず互に接近し接触し影響しつつも結合される段になると、矢張相違点を有してゐるため物語の細部に至つては奇妙な錯綜を免れる事は出来ない。作中の人物、殊に主要人物についても或物語ではAが主人公であり、同じ系統の他の物語では更に副主人公とも言ふべきBが存在し、又別の物語ではBが主人公であつたり、更にC、Dなる名前が主人公或は副主人公として出現する事は不思議とするに足りない。聖盤伝説に於てはパーシヴァル、ガウェイン、ランスロット、ギアラハッドの四人が主人公として現れてゐるが、この中の一人だけを取扱ふものもあり、二人を或は三人を取扱つてゐるものもある。この伝説の取扱ふ材料一般についても共通的に見られるものは、

一、仇討。

二、呪文を解く事——原始民族が超自然的な力の存在に対して持つ漠然とした意識を示してゐる。即ち魔術によつてのみ超自然的な力に通じうるものであり、智識によつて魔力は解消されるといふ單純且つ眞理ある考へ方。

三、愚人物語——原始物語に見られる愚人話とは異り聖盤伝説に於ては武人や傑人の子が世間から隔離して育てられ、一人前の知識を持たず長じて世間に歸り社会で最も偉い人となる。

四、魚を釣る人——魚釣は王又は富める人の証拠であつたり、

魚はキリストの表徴である事もある。

五、槍、劔、皿、槍は十字架上のキリストの脇腹を衝いたものとして知られ、聖杯に次いで重要視されてゐる。劔は時には仇討のための武器であり又時には神器として取扱はれてゐる。皿は杯と考へられてゐる場合もあるが、聖盤は杯として之と別に皿が存在し之をも神器として取扱ふ場合もある。

この伝説の由来については明らかな文献がないため決定的な説を立てる事は殆ど不可能であるが、今日まで学者の推測するところによると、恐らくラテン語で書かれたイヴンゼリウム・ニコデミ、或はゲスタ・ピラチ等が存在してゐたらしく、それをクレシアン及びその継承者ゴウテエ、及びロベール等は資料として用ひたのではないか更にマップ或ひはメープ(Walter Map or Mape)がそれを一つに纏めたのであらう。クレシアンがプロローグの中に触れてゐるフランダースの伯爵から与へられた一書とは之を指すのであらうと。この問題についての憶測は種々あるが一般に信じられてゐるのは、

ケルト説で一八三八年レディ・ゲスト (Lady Guest) 訳のマビノヂオン (The Mabinogion) が出版されてからは、その中の三つのウェールスの物語がクレシアンの物語に似てゐるので、この相似を学者等は聖盤伝説に結びつけて、聖盤伝説はウェールスのものであつたのがブレリン・レイス (Brelin Lais) といふウェールスの話し家を通じ伝へられ、それがクレシアンの捕える所となり文学的形態をあたへられたのであると。マビノヂオンそのものもウェールスから伝へられて再びウェールスに歸つ

た物語を集めたものである。そして聖盤伝説もマビノヂオンに含まれてゐる他の物語と共にウェールスから伝へ渡つたと考へるのに不自然はない。

その他にもこの伝説を亞歷山大帝のロマンスや他の東洋神話に結びつけ、東洋の改宗に関する伝説の中に聖盤伝説の類似したところがあるとか、聖餐の杯とバビロンの神話中の奇蹟を行ふ器物との關係をとくものもある。又自然崇拜説を持出し、ギリシャのアドニスやこれに似た自然崇拜の要素、殊にその儀式と聖盤行列の形式とを關聯づけたり、自然崇拜の精神とこの伝説中荒蕪の地が豊沃になるとか傷ける王が健康体になつたといふのと、自然の年毎の枯死と春の復活、成長の力とを表現するものであるとし、更にキリスト教の復活祭、聖誕祭等が異教の自然崇拜の祭祀から転来したものとして結びつけてゐる。この伝説の權威者アルフレッド・ナット (Alfred Nutt) に従ひ「聖盤の由来」と「探索譚」の二つの部分に分けて、その由来に見られるキリスト教的要素をそのまま起源として認容するものがある。中世キリスト教に於て特に重要視された聖徒の遺物に關聯して最後の晩餐の記念品である聖杯に対する宗教的感情を展げて伝説にまでしたといふ風に解してゐる。ブルースは只管このやうな憶測説を斥けて、現存の文献を最古のものとしてそれにのみ頼るのは危険であるから、この伝説に關するかぎり起源を明らかにするための努力を払ふより、寧ろ伝説發展の過程を細かく検討する事に努むべきであると主張してゐる。つまり、基督教の影響が非基督教的伝統に触れて交流した場所と時代とを明確にする事は更に興味のある事である。槍

と蓋とは基督教国 (Christendon) の拡張に應じて生じた色彩と考へられるし、主人公が仇討をしたり、魔力を解き除く事が目的とされてゐるが、之が變つて探索譚になつたのではなからうか。この観方をつきつめると初めヨセフの伝説の起つた地方のある地点、即ちフェ・キャンプ (FéCamp) に聖盤が保存されてゐると信じられてゐた。その場所に於て基督教が非基督教的伝統に触れたのである。かくして基督教化されたこの伝説が海峡を越へて英國に齎らされてからは、フェ・キャンプに代るべき聖地として當時大陸にも比肩するもののない大加藍を有するグラストンベリーを定め、この伝説を専ら英國的なものとなしたのである。大陸に於ける當時のカトリック教会に於ては聖盤伝説は基督教史の一部としても、又聖徒物語に準ずるものとしても認められなかつたので、英國に移されてからは當時の王ヘンリー二世のカトリック教会、特に法王に対する反感から聖盤伝説を純英國的なものとして之に英國民の改宗を結びつけさせて、延臣であり同時にオックスフォードの副監督を勤めてゐたマップに書かせた。彼は皇子に捧げて「聖盤の由来」(L'Éstoire de Saint Graal) (十二世紀) を認めた。かうした立場から見るとヘンリー二世の政策がこの伝説を新しい方向への展開に導いたと見る事が出来る。即ちこの伝説は英國に於て、マップの手によつて完全にキリスト教的成立をなし、又一方英國教会の成立史の物語として存在するやうになつたのである。マップはパーシヴァルに代つてランスロットの子ギアラハッドを主人公とし、彼の禁慾的な理想を探索譚に於て具現させてゐる。アーサー伝説の持つひたむきな荒武者振と忠実一

点張りの恋愛にジオフレイ・オヴ・マンモス (Geoffrey of Monmouth) の荒唐無稽な歴史に聖盤伝説を加へて宗教的神秘的な色彩を施したのである。而しマップはヘンリー二世より与へられたラテン語の原典をフランス語に書いたので、英語でこの伝説を初めて書き、英國に於ける印刷術の始祖カクストンにより上梓されたのは、トーマス・マロリー (Thomas Malory) の「アーサーの死」(Morte Darthur) である。この書は中世期も終りに近づいた一四七六年に出て、中世期の所産であるアーサー・ロマンスの集大成として近世文学への伝承の重大な役目を果してゐる。作者はこの書は出典としてフランスのロマンスに拠つたといふ事を作中六十八度述べてゐる、と大英伝記辞典は報じてゐる。第十三巻から第十八巻までにある聖杯物語 (Sancgreail) は主としてフレンチ・ロマンスの「ランスロット物語」及び英國韻文物語 (English Metrical Romance) 1440 中の「アーサーの死」によつてゐる。マロリーは「アーサーの死」の巻末の敬虔謙讓な祈禱の詞に作者の姿を表はしてゐるが、この態度は特に宗教的由緒深い聖杯伝説を取扱ふに當つて見られる。第十二巻の結語につづいて聖杯物語の序とし次の如き莊重体の文をかかへてゐる。

「さて之より聖杯のありがたき物語を始めん。そは聖き器、われらが主イエス・キリストの血のみしるしにして、アリマタヤのヨセフこの國にたづさへ来りしものなり。主よ罪とが深き魂を憫み給へ。」

“... And herewith the noble tale of the Sancgreail that called is the hooly vessel and the sygnelycacyon of

the blessed blood of our lord Jhesy Cryste, blessed mote it be, the which was brought in to this land by Joseph of Armathe therefor on al synful souls blessed lord thou mercy."

このやうな祈禱文を思はせる序は以下各章の初めにも見る事が出来る。「アーサーの死」に見られる宗教性は之に矛盾した道徳と甚だしい対照をなしてゐる。聖杯物語にあつてさへ必しも宗教的雰囲気充滿してゐるのではなく、單なる伝説の綜合及び伝承として、伝説的獵奇的な描写さへ含んでゐる。主人公としては主としてランスロット、パーシヴァル、ギャラハット及びボールスを挙げてゐる。ランスロットは模範的な騎士でありながら、ギニヴィアとの関係のために贖ひ得ぬ汚点を持つものとして聖杯の探索を達成するのは不可能であるとし、そのためにランスロットの子供ギャラハットが居る。即ちランスロットが道ならぬ恋と知りつつ愛したギニヴィアと間違えて関係したイレイン(Irene)との間に生れたのがギャラハットである。ランスロットは聖杯を渴望しつつ、夢幻の中に見えざる手に支えられた聖杯が病める人を癒し力を与へるのをまざ／＼と見た事もある。聖杯を祀つた社まで来ながら、祠の扉の開かれるのを見ながら、「この聖き所より立去れ」と神の言葉を聞かねばならなかつた。更に強いて祠の中に這入つて、赤い錦繡に被はれた聖杯を見たが、熱火を含んだ息吹で顔を打たれ外へときき出されて了つた。之にひきかへギャラハットは小舟の中で天使と二本の燭火、血の滴る槍等を備えた聖餐の卓で聖杯により聖餐を受けて、祈禱をささげて居ると杯の中か

ら受難のキリストともおぼしき姿が現れ優渥な言葉で今後は決して姿を隠さないとの約束をあたへた。マロリーの「アーサーの死」には典拠となるものが六つあるといわれてゐる。彼の聖杯物語は資料を集めて組合せたといふだけで統一を与えようとしたやうな意図は見られない。カクストンの賞讃してゐるやうに、「その美しき散文」によつて、又「容易な文体」で、中世紀の伝説を集大成した事は近世への大きな寄与である。

さて中世期の神秘的な幾段階を経る中に、このやうに宗教的伝説として完全な成立を遂げ、特に騎士のロマンスに結びつけられ、アーサー物語に宗教的であると同時に複雑な夢幻的な要素を多分に添へた聖杯伝説は、十九世紀に至りテニソンにより近代文学の中に再現を試みられた。テニソンは明らかに聖杯を單なる伝説の再現としてでなく、「国王牧歌」全篇の構想中の重要な一部分として、又聖杯そのものを伝説の伝統から離れてそれらとは異つたもののシンボルとして示してゐる。即ちテニソンはアーサー王を理想的な人物、殊に理想的な統治者として現し、理想の必要を、理想に対する自由意志をアーサーは騎士に語り、テニソンは我々に説教してゐる。

テニソンは聖杯伝説を胡麻化してゐるとの比喩を受けた事もあるが、先づ聖杯の由来についてはマロリーを適當に承け継ぎ、無韻詩十三行に簡潔に纏めてゐる。それによると聖杯は最後の晩餐にキリストが自ら用ひたものとされてゐるが、之に十字架上のキリストの血を受けたといふ事には触れてゐない。パーシヴァルの妹である尼僧が尼寺で先づ聖杯を拜した事からアーサーの騎士中

最年少者のギャラハッドがアーサーの館で衆人の中にゐながら彼一人聖杯を拜した事が、聖杯探索の口火となつてゐる。円卓団の騎士等は我も我もと誓を立てて探索に赴く事になつた。探索の主(“Grail Heroes”)としてクローズ・アップされてゐるのは、この聖杯物語の語り手であるパーシヴァル、ギニヴィアとの恋愛の絆を断ち切るために出かけたランスロット、その徒弟のボールズ、それから他のロマンスでは騎士の模範として表はされてゐるがテニソンによつては、「向ふ見ずな、見当違ひな事許りする騎士なり」(“A reckless and irreverent is he”)と言はれてゐるガウェイン等である。アーサー王の「あまりに暗い陰を宿す予言」(“too dark a prophet”)が話の伏線をなしてゐるとほり、清純な武士ギャラハッドを除いては誰も探索の冒険に失敗して、再びアーサーの許に帰つて来た。ランスロットは運命的な恋愛から脱れるための精神的飛躍の契機として聖杯を求めた。他の騎士は円卓団を蝕む惡に失望しより高いものを求めて行つたのである。

テニソンは聖杯によつて何を象徴してゐるか。メープは英国教会を聖杯によつて象徴した。テニソン註釈者リトルデール(Lit-tledale)は靈性の完成と解釈してゐる。理想的な人間である筈のアーサーは何故探索へと心急ぐ騎士等、靈性の完成を追求する騎士等を引とめようとしたのであらうか。アーサー自らは

「王は統べ治むべき所領を守るべし

耕す土地を委ねられし農夫は

仕事の果つるまでは

与へられし土地を去る事なきが如く。」

“...the King must guard

That which he rules, and is but as the hind,

To whom a space of land is given to plow.

Whom may not wander from the allotted field

Before his work be done.” (11. 905-9.)

と王の責任觀を披瀝してゐる。そして騎士等は王畢生の仕事、社会惡を除去する、社会改革の仕事に忠実に従つて来た人々である。

「眞実なる者あり。輕率なる者あり

されど汝等皆王の姿を宿し居るなり」

“Some true, some light, but every one of you

“Stamp with the image of the King;”

によつて知られるようにアーサーに近い立派な武人揃ひで、彼等の一般社会に對してもつ關係は

「偉大なる世の模範となり

時代のよき先覺とならんため」

“To serve as model for the mighty world

And be the fair beginning of a time,”

である。即ち彼等の背後には彼等より一段と低く、彼等の指導や援助を必要として居る一般人の存在を予想させるものがある。然るに彼等の社会にさす惡の陰に失望した彼等は、王の使命觀に従つて居られなくなり、尼僧が断食と祈禱三昧の中に見たものに、年若いギャラハッドが熱狂的な信心の瞬間にみたものに動かさ

れ、又或者は之に雷同して聖杯の探求によつて靈性の一大飛躍を試みようとした。社会を支配する一つの主義、一つの傾向が過渡期に於て、その初期の歩調に變調を來し、改修の方法なしと考える人々は失望し、凡てを捨てて理想の追求に走るであらう。それは世捨人、尼僧のする事である。人間の最も崇高な慾求は神と一つになる事を望むことである。即ち究極の眞理を自ら把握し度いといふ要求がそれである。而しこの要求は地上を歩く人間にとつては個人的にも又社会的にも危険をもたらす恐れがある。個人にとつてはさうした宗教的努力に対して凡ての人が訓練を受けてゐる訳ではないから、そのために充分な準備を整へ、覺悟がなければ、アーサーの預言するように「迷はせる燈」(Wandering Fires)に惹かれ、挫折して了ふであらう。社会にとつては指導的立場に於て働くべく選ばれた人が、使命を放棄して去るといふ事は指導団体の力を弱め、衰退を早める原因となる事は明かである。テニソンは神人の關係に於て人は必らず一人ならざる事を前提としてゐる。高かるべき靈性のための祈禱の生活、探求の生活は決して社会的には至高のものであり得ない。ここにテニソンの人類に対する樂觀的な使命觀が示されてゐる。

テニソンはアーサー伝説の一面しか見てゐないとの非難を受けてゐるが、歴史的な伝説を再現しやうと試みたのではない事は「国王牧歌」の終りに附した女帝への献詞 (To the Queen) の中にジェフリー・オヴ・マンモスやマロリーの歴史的説明を排撃し、明らかに理想化した人物としてのアーサーを表現したと云つてゐる事によつて知る事が出来る。アーサー伝説の一部分となつてゐる

る聖杯伝説もテニソンにとつては、その宗教性が最大の要素ではない。靈性の高揚が完成か、理想の達成か。その一つ或は二つを意味してゐると考えられるであらうが、結局作者の構想に必要なだけの伝説の事柄のみを選び取り用ひたのである。

アメリカ大陸に於てはラッセル・ローエル (Russell Lowell) が「ラウンフォール卿の幻」(Vision of Sir Launfal 1848) なる即興的な詩の中に聖杯探索にことよせた教訓を垂れてゐる。ラウンフォール卿は伝統的な騎士とは無關係に作者の空想の人で、彼がよきサマリヤ人的な體驗をすることに聖杯探索の眞體のある事を悟るに到る経緯を語つてゐる。聖杯の意味を隣人愛、人類愛までに拡大した事はローエルの創造であり又功績でもあるが、伝説から全く遊離してゐる点で一つの雰囲気を描き出したに過ぎない。それは伝説ではあり得ない。

テニソンの聖杯物語は「牧歌」の他の巻との關聯からも、伝説の立場からは最小限度の事柄を取入れてゐると云えるかも知れないが、又全篇の構へから見ると最大限度に伝説の要素を取入れたとも云える。サッカレー (W. J. Thackeray) をして「牧歌」を讀む事は子供にアラビヤ夜話を持たせた位私は喜んでゐると賞讃させた程、それ程にここに取扱はれてゐる伝説はその伝説の持つ聯想 (association) の凡てと共に讀む人に鑑賞されてゐる。(一九五一年一月)

参考書

1. James Douglas Bruce: The Evolution of Arthurian

Romance from the Beginnings down to the Year
1300 2 vols. Göttingen.

2. W. Lewis Jones: The Arthurian Legend, The Cambridge History of English Literature.

3. Chiaki Oda: Tennyson